

# 第2章 橋本旅館

所在地：千葉県柏市布施 1612

建築時期：昭和初期

## 1 布施の歴史

江戸時代以前から布施地区には、常陸方面へ向かう「七里ヶ渡」と呼ばれる渡し場があり、多くの人々が往来していたと考えられている。この道は、元和2年（1616）幕府が治安維持のため定船場と定めた重要な渡し場であった。利根川東遷によって流路が変わり、関東の流通路が整備されるにつれ、流山を經由して江戸への物資輸送路の荷上場として、布施河岸が成立する。布施村は多くの石高を有する柏市内最大の集落へと変貌を遂げていくが、こうした中、往来する人々の信仰を集めたのが布施弁天東海寺である。祈願寺として領主の庇護を受け、名主らの協力を得て桜山を整備し、幾多の俳人たちが訪れるなど繁栄を極めていった。村人たちは農作業の合間に、参拝客相手に菓子や軽食を提供し、草履とわらじの店を並べていくが、橋本旅館が創業したのはこの頃、天保年間である。

## 2 橋本旅館

### 2-1 概要

柏駅から花野井方面に至るバス通りから北に折れて、布施弁天通りに入る。布施の集落を構成する屋敷地がこの道沿いに並び、奥まで進んだ先に橋本旅館の建物が立つ。利根川に近い土地は今までに幾度も洪水の被害に遭い、大正3年（1914）には堤防が決壊した。橋本旅館でも2階の窓から舟で外に出たほどであり、旅館はこの水害後の昭和初期に建て替えられた。現在の大きな建物の新築にあたって当時千円の費用を要したことから「千両普請」と呼ばれ、東京神田の人から二百円借りて、一割ずつ返した「証文」があると言う。

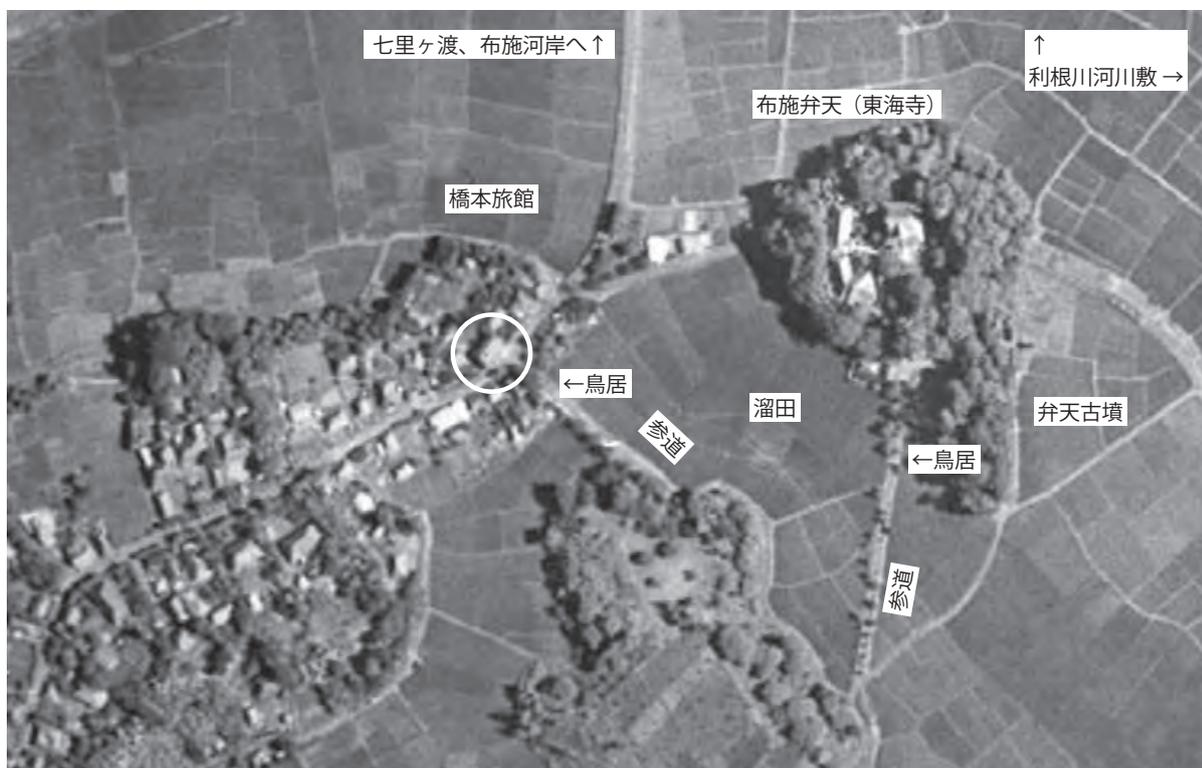
かつては旅籠や土産物店が軒を並べた通りの建物は代々更新されてきたものの、往時のまちの雰囲気は今日も感じられる。中でも橋本旅館は、通りが曲線を描いて突き出すところにあり、緩やかな坂を下りて寺山下地区に近づく者の前にその姿をあらわす。重厚な棧瓦葺の屋根をのせた堂々とした木造2階建のかもしだす存在感より、地域のランドマークとなっている。

**布施の溜田** 旅館や茶屋が立ち並んだ布施弁天の門前町として、布施は昔から大勢の参拝者で賑わいながらも、参道沿いの景観を捉えた史料は数少ない。「溜田<sup>ためだ</sup>」とは、稲作の終わった冬場に雨水を溜めておく傾斜地上方の田んぼで、田植えの頃にここから下方に水を送る。この地域で上沼や下沼と呼ぶ名称の「沼」はこの溜田を指し、このあたりでは周囲の田畑などの位置を示すよりどころとなっていた。農地が住宅地へと変えられていった昭和時代後半より徐々に田畑の埋め立てが始まり、日本庭園（1986）やあけぼの山農業公園（1994）が誕生したことで、溜田は姿を消した。[p40 参照]



古写真1 布施弁天参道越しに見る橋本旅館付近 撮影時期不明 『歴史アルバム柏』(1984)所収 [市教委蔵]

- ・画面手前に溜田、さらには旅館の前から東に延びる参道が写り込んでいることから、建物は画面左が前身の橋本旅館。
- ・中央に常陸屋（魚店）、その隣は土産店と思われる。
- ・旅館の屋根は切妻造で建物の間口は5間半か。現在の建物は入母屋造、間口は7間。



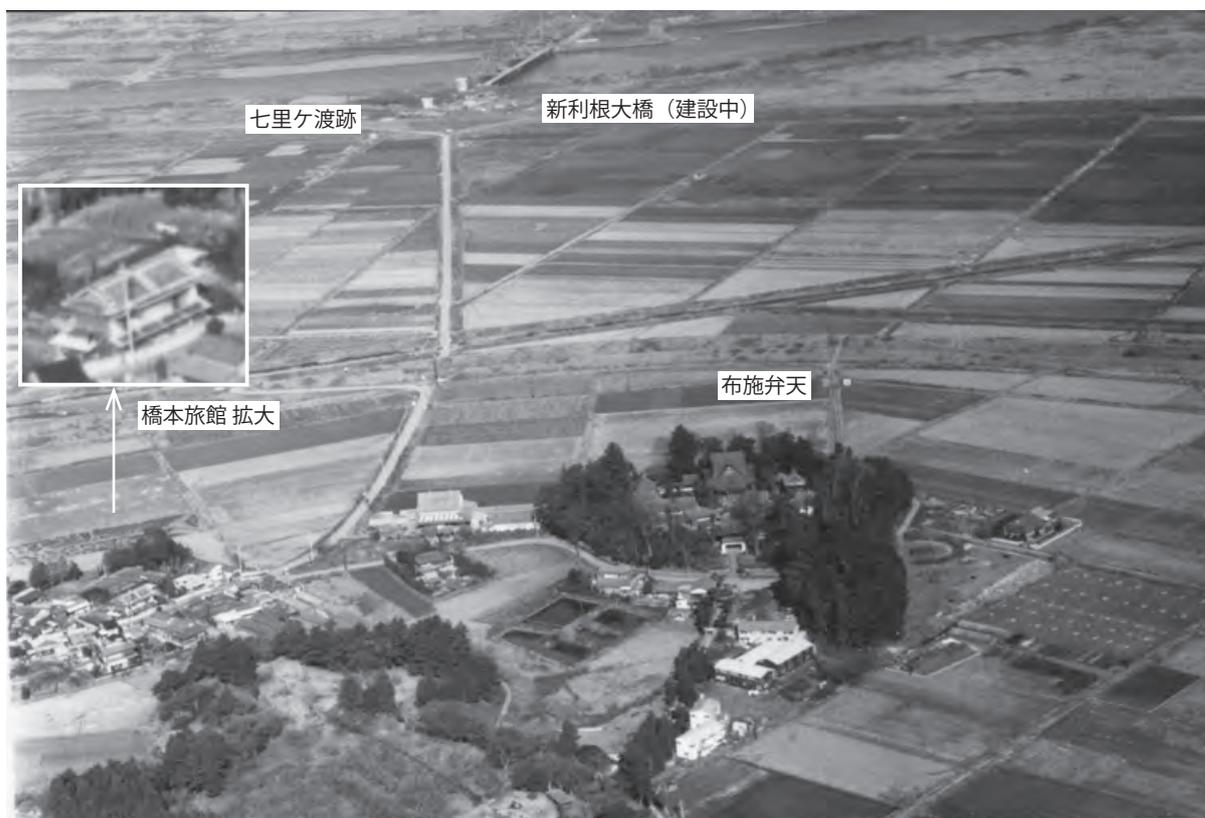
古写真2 布施 1948年7月撮影 国土地理院上空写真 (USA R1585 71) を加工 橋本旅館を○で示す。

- ・布施弁天の参道は、橋本旅館前の鳥居から始まり溜田の土手を通り、V字型に鋭角に折れて寺の正面に向かう。



古写真3 布施弁天開帳に向かう参拝者 1965年4月撮影 [市教委蔵]

- ・正面に橋本旅館が写る。旅館の営業は終わっているものの、通りに面する姿は往時の面影を留めている。
- ・参道入口の鳥居が見える。



古写真4 上空から見る布施弁天周辺 昭和50年頃撮影 [市教委蔵]

- ・橋本旅館の屋根には目地漆喰が「日」の字型に施されている。
- ・画面奥に建設中の新利根大橋が見える。

旅人は、旅館前の水路に架け渡した石板を渡り、正面中央の玄関で迎えられた。旅館の1階には家族の部屋や台所が配置され、2階の続き間は食事や宴会に使用された。上階は、地上から少し高くあがるだけでたいへん開放的で、春になると東側の廊下の窓から、あけぼの山公園の桜を一望できる。布施弁天の諸堂の屋根をもここから拝める。

宿泊客は、旅館の北側奥にある平屋の離れに滞在した。昭和40年代後半に火災で失われた離れには、6つの客室が横並びに配置されており、それぞれに床の間があり、花が生けられていた。

旅館の2階では、主に団体客を受け入れ、春には新四国相馬霊場八十八カ所巡りのお遍路さんが訪れた。布施弁天は取手から歩き始める旅程の中間にあり、先代坂巻孝氏と親交のあった板橋不動尊の住職がお遍路さんの先達を務めた。お遍路さんは米を持参し、旅館では卵焼きと漬け物を出してもてなした。また毎年初冬の11月頃には富山の薬売りが来て、風邪薬・腹痛の薬・目薬など薬箱の中身を補充しに離れに宿をとった。

利根川至近の立地を活かし、旅館ではうなぎや鯉こく等の川魚料理が名物であった。江戸時代末には天狗党の陣屋となり、また北海道に向かう土方歳三が宿泊し、さらには徳川慶喜が鴨猟の際に橋本旅館を利用したと伝わる。

かつて旅館の裏には何十人もが一度に入れる大きな舟風呂があって、第二次世界大戦後に泊まりに来た進駐軍の兵隊たちの間では、ヤギの乳を入れた風呂が人気であった。

昭和30年代に旅館の営業を終えたのちに、家族の住まいとして手が入れられながら、大切に使い続けられてきた。建物の歴史を伺うにつれて、現在は住宅の形式をとる室内からは、往時の旅館の姿が浮かびあがってくる。



春になると橋本旅館2階の東廊下からは、桜色に染まるあけぼの山公園への眺望が得られる。



橋本旅館 正面中央にあった玄関では多くの旅人が迎えられた。



坂を下り布施弁天に向かう参拝者の前に現れる橋本旅館



北東から見る  
隅に反りのある重厚な軒廻りと入母屋造の屋根。  
北面の小さな庇がかつての出入口の位置を示す。  
この向かって右側に、平屋の女中部屋が取り付いていた。



南面の台所の土間には、3台のカマドがあった。  
現在は拡張され、日当たりのよいサンルームとなっている。



鬼瓦 中央に家紋の抱き茗荷が見られる。



棧瓦葺の屋根 大棟は丸瓦を輪違いに積み、模様をつくる。



南妻 入母屋造の屋根の破風板下端に曲線が施され、柔らかな印象となる。妻壁は黄色の色壁。



緩やかな起伏の続く布施の町並みと橋本旅館。利根川対岸の取手の緑地帯が見える。



茨城より入手した、下屋全長に及ぶ一材からなる杉丸太の桁

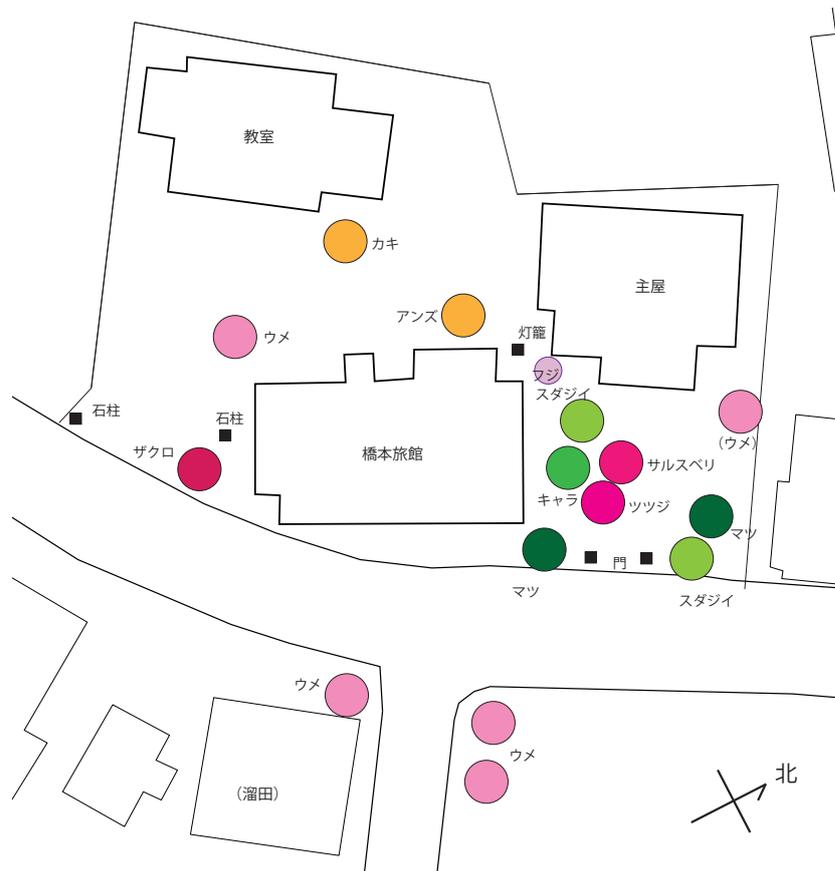


表から続く重厚な化粧軒は、側面から背面へと廻り、まばら垂木に鼻隠し板の簡素な造りになる。



背面に新設された玄関。住宅への改造時に正面玄関は閉鎖され、台所が造られた。

庭



敷地配置図・樹木図 S=1/300

柏市都市計画図を加工、加筆

旅館及び住宅を囲む庭には、旅館の庭木として手入れされてきた古木を含む樹木や植生が数多くある。離れの正面に見えたアンズの木は春に花をつけ、利用客が季節ごとに変化する庭を楽しんだ様子を想像できる。上図に教室と記す建物では、豚とチャボを飼っていた。



## 2-2 建物の特徴

橋本旅館の建物は、木造、2階建、入母屋造、棧瓦葺、規模は間口8間・奥行3.5間（間口、奥行共下屋を含む）とし、正面を東に向けて立つ。重厚な軒廻りを上層の正面と両側面に廻す。正面に取り付く下屋の軒は、杉丸太の長尺材からなる桁によって支えられる。外壁の大部分は金属パネルで覆われており、一部漆喰塗、玄関廻りはモルタル塗及びタイル張りとする。側廻り建具はアルミサッシに更新され、雨戸は利用されなくなっている。古写真から、当初の外壁は下見板張り、またガラス戸は引違戸ではなく、雨戸のように戸袋に納める形式であったことがわかる。その後ガラス戸と雨戸が共存した時代があったかどうかは、不明である。

### ・平面

尺寸を基準尺として設計された平面の大部分は、3尺（909ミリ）を単位とする格子上に配置された柱によって定められる。但し、正面下屋の出を4尺（1,212ミリ）とする。1階は正面と背面の2列からなり、桁行方向にそれぞれ3部屋を配置する。北壁沿いに設けられた階段から2階に一直線で上がる。2階では正面東側と背面西側全長に幅3尺の廊下を設け、この間に八畳間を3つ並べる。

1階平面北端の階段を一直線に登り、2階に至る。東側の廊下から、春には桜が満開のあけぼの山公園をのぞめる。8畳の居室3間からなる続き間を、ここでは便宜上、南から順に居室1・居室2・居室3と呼ぶこととする。居室と廊下境には障子を建て込み、部屋境には襖と板欄間（居室1—居室2境）・<sup>おさ</sup>箴欄間（居室2—居室3境）を設ける。板欄間には、山と海あるいは川の風景が透かし彫りされ、板目の木目を効果的に用いて打ち寄せる波を表す。竿縁天井、板目の天井板。廊下の床板はイチヨウ材からなる。（旧状については、2-3平面の変遷を参照。）

### ・屋根

棧瓦葺の屋根頂上にある大棟両端の鬼瓦には、家紋の抱き茗荷がつけられている（当初の鬼瓦については後述）。台<sup>のし</sup>熨斗瓦と<sup>のし</sup>熨斗瓦の上に輪違いに丸瓦を並べ、<sup>がんぶり</sup>雁振瓦をかぶせる。妻壁寄りの範囲では棧瓦の重なりに棒漆喰が施されている。この屋根がことさら重厚に見えるのは、葺き足が5寸5分と短い深切りの棧瓦が用いられているからである。古写真1に見るように前身建物の屋根は切妻



左図部分拡大

正面下屋の軒先 模様のない瓦 (A) と巴・唐草模様のある「柴安」瓦 (B) が混在。A は大屋根正面及び西面にも見られる、葺き替えられた瓦。

造であった。建て替え時に屋根を軒反りのある入母屋造とすることで、さらに立派な外観となった。

橋本旅館の屋根に葺かれている燻し銀色の棧瓦は、通常見るものと比べて屋根の流れに沿って瓦の枚数が多く配置されていることに気づく。この深切りの瓦は、屋根面を葺いた時に瓦が重なる角の切り込みを深くすることで、重なりを多くとり、葺き足（下の列の瓦との距離）が短くなるように作られている。すなわち瓦の枚数も多く必要となり、瓦を葺く手間もかかる。重厚に見えるだけでなく、屋根面を覆う瓦の層は厚くなり、建物を雨からまもる効果も高まる。

敷地内にこの形式の瓦が保管されていたことにより、詳細に観察することができた。次ページ以降に実測図と写真を掲載する「柴安」の刻印のある軒唐草瓦〔軒棧瓦〕と地瓦〔棧瓦〕で葺かれていた。地瓦とは、軒先より上方で最も枚数が多く屋根面を構成する瓦を指す。

また、旅館の屋根から降ろされた「橋」の銘の施された大きな鬼瓦が、両脇に取り付くヒレとともに残されている。鬼瓦が2点あるのに対しヒレは1組しかないため、ヒレや大棟廻りの瓦の落下がきっかけとなり、屋根の部分葺き替えが行われたことが考えられる。

現在、屋根全面と正面下屋庇の大部分に葺かれている軒唐草瓦を観察すると、正面と西面はすべて模様のない万十瓦であるが、背面と東面には、保管されている柴安瓦と同じ巴と唐草の文様の瓦が見られる。瓦の色や風合いの違いから、ある時期に正面と西面の軒唐草瓦、両端の鬼瓦、鬼瓦の納まりに関わる風切り丸や雁振瓦の一部などを新たなものに取り替えて化粧直しし、補足品の入手が難しかった地瓦については既存の瓦のままとされたようである。同様に地瓦の葺き足が短い下屋庇の軒先にも、万十瓦と柴安瓦が混在して用いられている。

実測対象とした瓦は軒唐草瓦と地瓦のそれぞれ1枚のみなので、瓦の製品精度や施工時の誤差、経年によるずれなど含んだ数値であるが、屋根面に葺かれた流れ方向の瓦の数枚から割り出した葺き足5.5寸（16.7センチ）、瓦の歩み8寸（24.2センチ）と合致する。

地瓦の裏側上端に、施工時に瓦棧にかける尻剣と呼ばれる爪が広くつけられるようになったのは、関東大震災以降である。多くの屋根から瓦が落下した経験から、安全性を考慮してつけられるようになった。柴安瓦には尻剣がなく、後述する柴安瓦の製造終了時期の歴史とも仕様が合致する。



「橋」の字の入った橋本旅館の前身鬼瓦とヒレ。  
中央の鬼瓦下端の幅は52.5センチもある。

## 瓦調査

### 所見

#### ・軒棧瓦

平部瓦当文様は、中心飾りに8の字文が配される「江戸式」が施されている。中央8の字文は沈線が入る。加藤晃分類（「江戸時代の瓦における「江戸式」の展開」『國學院大学日本史学専攻大学院会史学研究集録』14、1988所収）では中心飾りはⅡ、唐草はK、子葉はjに相当する。平部文様区外右側には方形枠に「柴安」の刻印が押される。中心飾り脇部、唐草、子葉はいずれも単線で、唐草の頭部は円盤状に肥大化している。丸瓦部瓦当文様は8つの点珠と中心部分に三つ巴文が施されている。棧峠は丸みを帯びる。凹面（表面）はミガキが施され平滑であるが、凸面（裏面）は整形の痕跡はみとめられない。平瓦部中央上部に焼成前穿孔の釘穴が1箇所みられる。

#### ・棧瓦

凹面（表面）はミガキが施されているものの、凸面（裏面）は整形の痕跡はみとめられない。棧峠は丸みを帯び、頭側及び尻側に切り込みあり。凹面右、尻、頭の角、凹面左、頭角に面取りが施される。頭中央付近に方形枠に「柴安」の刻印が押される。

軒棧瓦、平瓦ともに凹面（表面）の劣化がみられ、葺き跡がみられることから、実際に屋根に葺かれていた資料であることがわかる。整形の様子は似ているが、全幅、全長ともに軒棧瓦に比べて、棧瓦が1 cm 以上大きい一方で、棧幅は軒棧瓦の方が広い。どちらも「柴安」の刻印がみられるものの、その字形が異なることから、軒棧瓦と棧瓦に使われた刻印の范は違うことがわかる。范の違いと大きさの違いに相関関係があるか否か今後の検討課題である。



軒棧瓦 正面



棧瓦 俯瞰

上方の深い切り込みにより、瓦の葺き足は短くなる。

瓦観察表

単位: cm

種類	文様	瓦当外形 瓦当内形	瓦当文様 区高	全長	全幅	厚	棧長 棧幅	頭切込長 頭切込幅	尻切込長	備考
軒棧瓦	小丸部: 右巻き三つ巴、連珠8、平部: 子葉 (くびれあり)、唐草 (頭円盤状)、中心飾り (脇くびれあり、中央8の字文、上部肥大、沈線)、点珠	7.6	2.2	25.5	26.8	1.9	19.8	—	6.8	刻印「柴安」、葺き足15.7cm、焼成前穿孔1
		4.3					5.6	—		
棧瓦		—	—	26.5	28.5	1.65	19.7	2.8	7	刻印「柴安」、葺き足17cm
		—	—				4.5	3.7		

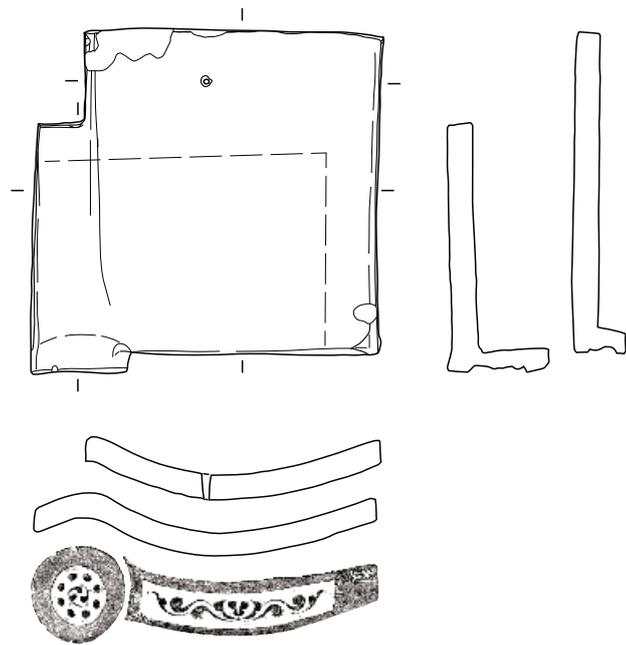
0 (1/6) 20cm



軒棧瓦刻印 (拡大)  
「柴安」



S=1/1



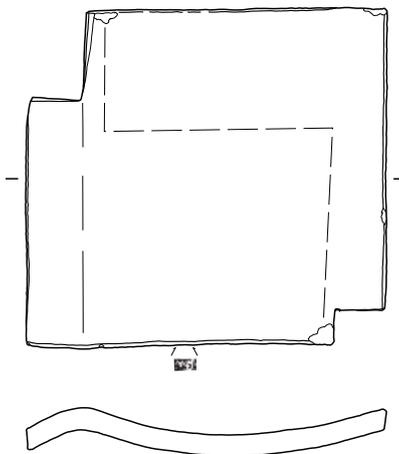
軒棧瓦 実測図・刻印拓本



棧瓦刻印 (拡大)  
「柴安」



S=1/1



棧瓦 実測図・刻印拓本

また、1階背面廊下・1階南側の広縁・2階玄関の屋根には同じ煉瓦色の釉薬瓦が用いられており、同時期の改装であることがわかる。

### 柴安の瓦

敷地内に保管されている棧瓦は、橋本旅館の屋根に見られる瓦と同様に葺き足が短く、軒唐草瓦の文様が同じであることから、屋根葺替時に降ろされた瓦の中から状態のよいものを補修用に取り置いたものであろう。「柴安」の刻印より、東京で製造された瓦であることがわかった。

「柴安」の刻印のある瓦を製造したのは、現東京都葛飾区で鈴木安五郎の経営する窯であった。ここでは江戸時代末から関東大震災の発生した大正12年（1923）まで、瓦製造が行われていた。材料となる土が採取でき、燃料の確保と輸送に欠かせない水運に恵まれた葛飾区は江戸時代より瓦の産地として名を馳せ、今日の東京はもとより、江戸川を伝って商品は遠方へと運ばれていった。

同じ千葉県下の野田では、醤油醸造を担う家の屋根工事を市内の有限会社澤田瓦店（野田市中野台165）が代々担当してきた。5代目澤田政延取締役に対する、野田市教育委員会生涯学習課星野保則氏による聞き取りより、当店は「柴安」の瓦を取り扱っていたことが判明した。この瓦が使用された家には、高梨兵左衛門家／高梨本家、茂木七左衛門家／茂木本家、中野長兵衛家（茂木七郎右衛門家分家）、茂木啓三郎家（茂木房五郎家分家）、戸邊五右衛門家が挙げられる。なお、今日野田市市民会館として旧宅が活用されている茂木佐平治家には「柴安」の瓦は用いられていない。

高梨本家では、国指定名勝内にある複数棟の文化財建造物保存修理の記録によると、書院〔文化3年（1806）築〕に葺かれていた「柴安」の刻印のある棧瓦は、歩みは橋本旅館と同じ8寸（242ミリ）であるものの、葺き足を5.0寸から5.2寸（152-158ミリ）とさらに短くして、葺き重ねている。（註「名勝高梨氏庭園保存修理工事報告書」（2011）中、「安柴」と記載されている刻印が、正しくは「安柴」すなわち柴安を示すことが判明した。）また我孫子では、2016-18年に保存修理が行われた井上家住宅二番土蔵〔江戸時代末期築、我孫子市指定文化財〕の棧瓦に、「柴安」の刻印が確認されている。以上のように、普請に当たって上質な建築材料を求める中で「柴安」瓦が選ばれたことがうかがえ、またこのような採用事例から製造地に近い千葉県下にも製品が流通していたことがわかる。

### ・小屋組

梁間3間に渡された屋根の構造は、和小屋からなる。化粧垂木を受ける桁の高さに梁を設けて、この上に牛梁（中央）と廊下の入り側に桁行梁をのせる。これらに束を立てて小梁を受ける形式を2段設け、小梁の先端で母屋を支える。最上段の牛梁の上には棟束を立てて、野棟木を受ける。特に重量のある瓦葺を支えることを意識した構造にはされていない。

### ・軒廻り

野棟木と母屋で受ける野垂木は、背面でのみ地垂木を兼ね、桁を越えて外部に出る。

正面と両側面の軒廻りは、小屋組との間に懐を設けた本格的な化粧軒からなる。地垂木のみからなる一軒ながらも、化粧垂木は1間（6尺）あたり6支の枝割、すなわち1尺間隔で密度高く配置され、茅負と二重裏甲ひとのきを用いて、隅では軒を反らせる。化粧隅木先端を銅板巻きとする。さらに正面側ではかやおい窓上に丸太出桁の霧よけ庇うらごうを設ける。背面の窓上方にも庇がある。

## 小屋組



松材からなる和風の小屋組。画面左が正面側、下屋に向けて梁を突き出す。小舞野地、杉皮の屋根下地。見通した限りでは棟札や上棟式時の鎗矢や雁股はなかった。



画面右が背面側。柱材の転用（桁の下の部材）他、燻けた古材（前身建物の転用材か）が見られる。野垂木（地垂木）は桁を越えて軒廻りを構成する。



小屋組下方、正面側を見る。化粧垂木の尻が見え、軒裏に懐があることがわかる。牛梁に掛けた斜材を天井吊り木として野縁を支える。

室内 1階・2階



宝鑰（ほうやく） 隠れ笠 隠れ蓑 丁子 打ち出の小槌 七宝 巾着 宝珠

平書院 宝尽くしの板欄間



1階仏間 平書院 投網文様の障子建具、板欄間は宝尽くし（上図に詳細）



2階 東廊下 南を見る



イチョウ材の廊下床板

一方、背面では軒の出の短い、比較的簡素な造りとする。地垂木のみからなり、垂木先端に鼻隠し板を当てることで、側面から背面に短く折れる化粧垂木からなる軒廻りの厚さと調和させる。

妻飾りはなく、前包みと台輪の上にヤマブキ色の妻壁を設け、破風板下端は緩やかな曲線を描く。

建物正面全長に通された、茨城より入手した1本の大径材長尺物の杉丸太からなる桁は、旅館の土間から見える位置に配して建物の見せ場とするだけでなく、各部屋の室内にあらわされている。

### 2-3 平面の変遷

昭和30年代に旅館の営業を終えたのち、建物は家族の住居とするために改装された。1階の主な変更箇所と部屋の用途を下表に示す。(一部はさらに後年の改造を含む。)1階に大きな変化が及んだのに対して、2階では造作の改造や後年の南西隅への玄関増築を除き、ほぼもとの構成を保つ。

**1階** 家族からの聞き取りを参照しながら建物の変遷を整理し、平面の復原を試みた [p56 参照]。主要な柱の配置はそのままに、部屋間の間仕切りの位置や仕様、建具類が更新されたことがわかった。復原した昔の平面構成と現況を見比べると、壁があったところが開放されて襖や障子戸が建て込まれたり、逆に開口部が壁となり閉鎖されたところもある。1階では多くの柱の四方に板が張られている。これは改装時前の部材が取り付いた痕跡を覆い隠すために行われたものと推測される。

#### 旅館から住宅へ

旅館	住宅に改造
正面玄関	→ 正面を閉鎖して台所に。西面に新たに突き出し玄関を増築。
台所・土間	→ 居室(南東) 仏間(南西) → サンプルーム(南面)
仏間	→ 居間
居室(北西隅)	→ 応接室
帳場	→ 風呂場
女中部屋	撤去
風呂場(西面)	撤去 便所南側に基礎残存

#### その他

- ・台所の床は板敷きで床下に収納できる上げ蓋式。氷で冷やす冷蔵庫があった。
- ・西側の土間には3口のカマドがあった。
- ・台所から玄関を経て、仏間の北端にあった廊下を通して離れに料理を運んだ。
- ・帳場には火鉢があった。ここに盆棚を飾った。
- ・応接室となった居室は祖父母の部屋だった。

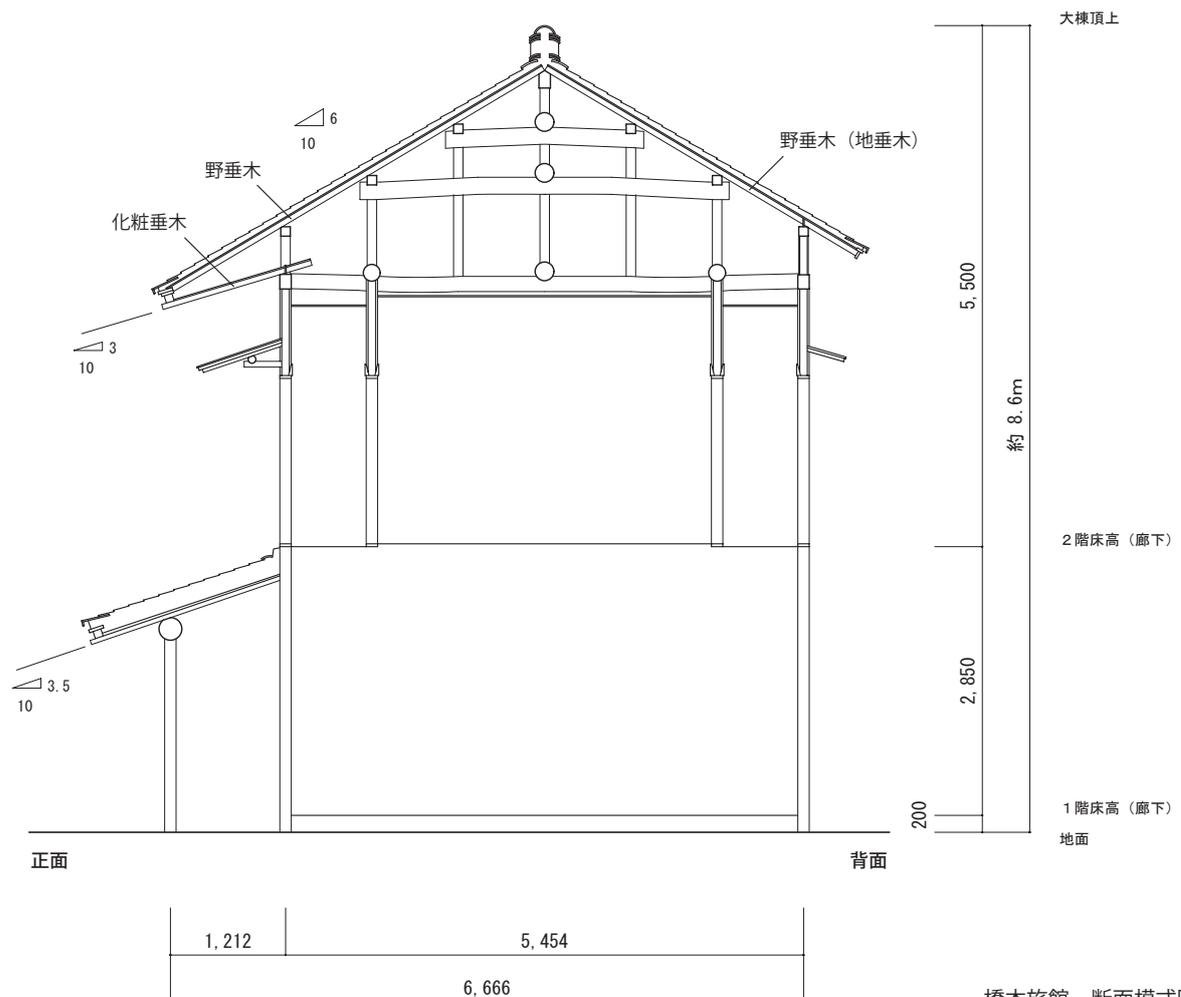


2階 先代の坂巻孝氏が詩吟教室を主宰していたことから、1970年頃に背面から直接2階に上がる鉄骨外階段を新設、南西隅に2階玄関を増築した。同時に背面廊下に流しと便所を設けたことで、上下階を分けて利用できる形式となっている。また、採光のために奥の部屋（居室1）の床の奥の壁に出窓が設けられた。居室3においては北壁から奥に張り出していた棚を撤去することで、階段を長くできるようになり、急な階段の勾配を緩くして踊り場が広くされた。

- ・居室1 床は出窓に改造されている。檜の床柱、モミジの落とし掛け、檜の床框が残る。床の天井では竿縁を中央で寄せて松葉のようにする。床脇の床は地板、地袋の痕跡はない。古写真から床脇には天袋と違い棚があったことがわかる。

- ・居室3 北壁西寄りに棚を囲んでいた杉しば丸太の「床柱」とモミジの落とし掛け、この向かって右側に煤竹を大胆に用いた丸い下地窓がある。床柱があるものの、階段頭上の空間を確保するために、床ではなく棚があった。現在棚の範囲には階段室に開く障子戸が建て込まれている。旅館であった時には、階段踊り場から居室に通じるこの下地窓をのぞいて、食事を出す頃を見はからったという。

- ・東廊下南端及び西廊下北端に押入。前者は、廊下の天井が押入の中まで続いていることから、後設されたものであることがわかる。一方、当初からある後者の押入正面には長押が回されている。



橋本旅館 断面模式図  
S=1/80

## 古写真に見る橋本旅館



古写真5 旅館正面外観、北半分

- ・2階廊下は、腰付の掃き出し窓。縦框（たてがまち）が2本並んで太く写ることからガラス戸は引き違いではなく、雨戸のように戸袋に引き込んで開けたと思われる。
- ・2階戸袋は現状より深い。
- ・旅館の向かって右手に門柱。門口の南側は竹塀、北側は板塀。
- ・北面に平屋の女中部屋を張り出す。
- ・画面右手奥に離れが見える。



古写真6（1953年3月31日撮影）

旅館の玄関前の家族

- ・ガラス戸に「橋本屋」の屋号。
- ・中央のガラスのみ透明で、周囲は曇りガラス。
- ・大きな石敷きで側溝を渡って玄関に入る。
- ・ガラス戸の外に雨戸で戸締まり。
- ・長い桁が見える。



古写真7 旅館1階 火鉢前の女性たち

- ・一九五三、三、三日とある。
- ・どの部屋か不明。帳場か。



古写真 8 昭和 40 年頃

- ・旅館の営業終了後、正面に板塀を設ける。
- ・2階廊下のガラス戸は下までガラスが入り、室内に手摺りが見える。
- ・2間ごとに柱が立てられ、引違戸に変更されている。
- ・屋根瓦に目地漆喰がない。



古写真 9 「昭和 47.4 自宅を曙山公園より望む」  
屋根瓦に目地漆喰が施されている。窓はサッシ、戸袋が現況と同じ。



古写真 10 背面玄関増築中  
2階の開口部は1間の間に引違窓



現況 古写真 6 に見る旅館玄関の位置を枠線で示す。



現況  
古写真 5, 8 に写る  
松の木。

室内 2階



棹縁を松葉状に配した床の天井



昭和40年代のクリスマスパーティー  
床廻りの造作が写り、廊下境は縦格子の中央にガラスの入る腰付障子戸



2階居室1 西壁には床の間があった（現況）  
向かって左に床、床柱を挟んで床脇からなる。



古写真に見る床廻り



床の前の先代



床脇の天袋と違い棚、  
地板が写る。



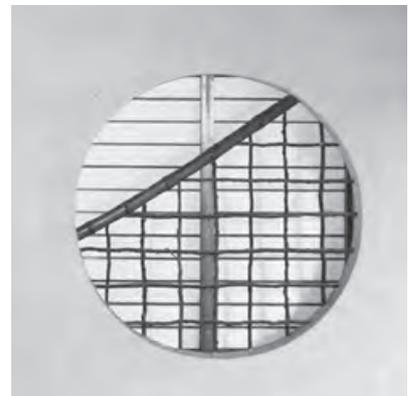
居室3 北壁には棚廻りの造作が残る。  
杉絞り丸太の「床柱」とモミジの落とし掛け。  
腰高の棚が階段の上方に突き出していた。



居室3 北壁全景 棚と丸窓から構成される。  
棚は撤去され、階段室上方に開く障子戸が建て込まれている。



2階 居室2ー居室3境の箴欄間（居室2から見る）



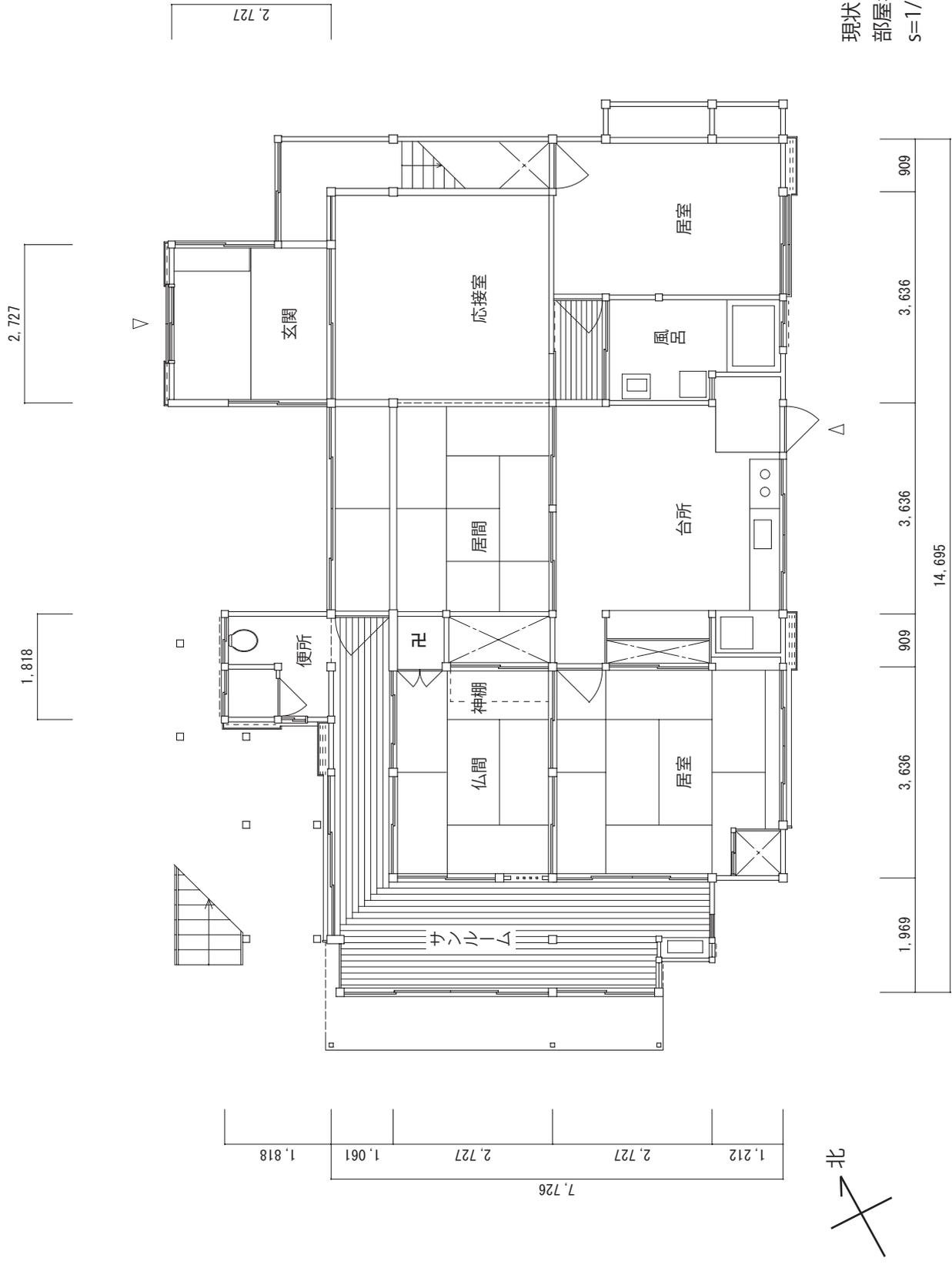
居室3 階段に面する円形下地窓  
ここから料理を出す頃合いを見た。



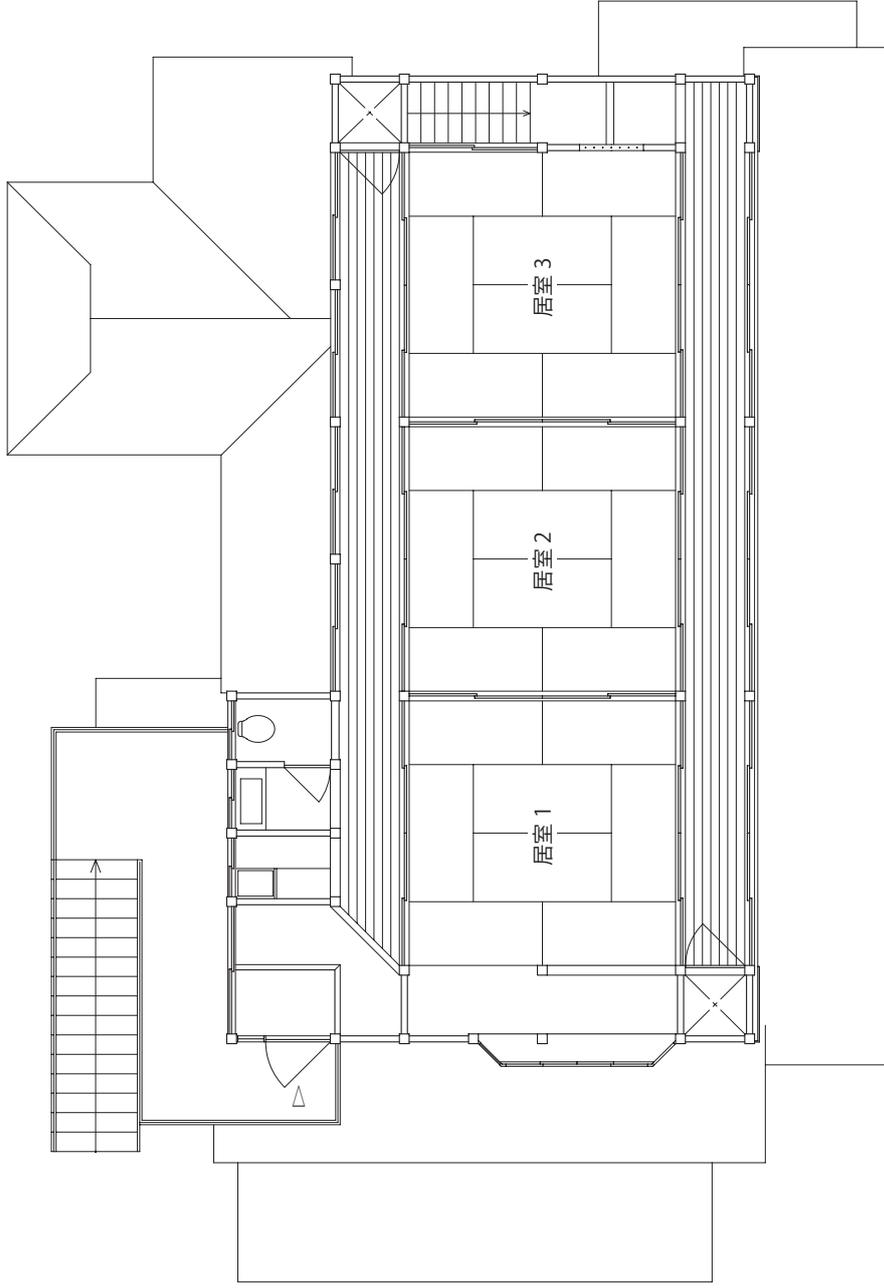
2階 居室1ー居室2境の欄間（居室1から見る）  
[上]東側、[下]西側



2階踊り場から見る階段  
丸窓外側の障子戸が見える。当初は  
急な階段が画面手前寄りから始まった。



現状 1階平面図  
 部屋名称図  
 S=1/100

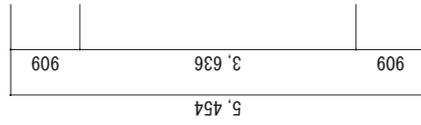
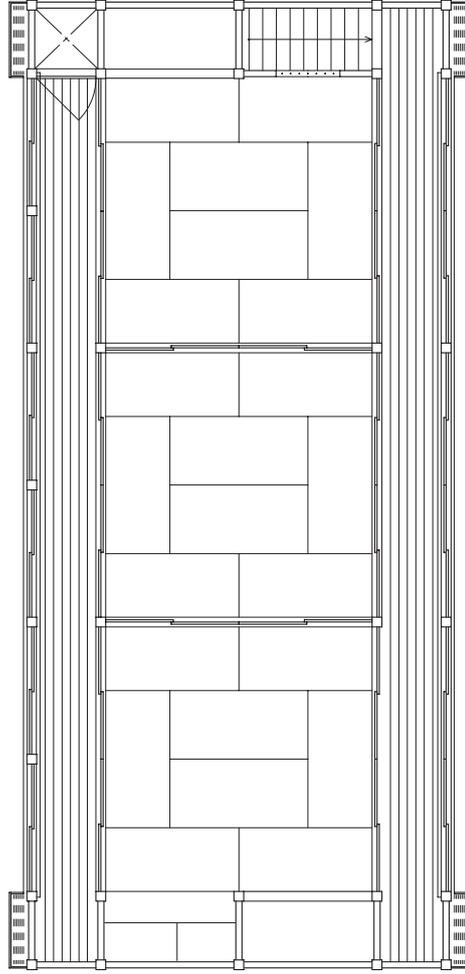


909	3,636	909
5,454		

909	3,636	3,636	909
12,726			



現状 2階平面図  
 部屋名称図  
 S=1/100



復原 2階平面図  
s=1/100

# 第3章 三上家住宅

所在地：千葉県柏市今谷上町  
建築時期：明治後期から大正期、  
2013年解体

## 1 南柏と三上家の歴史

三上家の所在する柏市今谷上町は市南西部にあり、JR南柏駅東口一帯で、西側を松戸市、流山市と接し、旧水戸街道が南北を走る。地形的には手賀沼に注ぐ大津川の支流が北東、江戸川へ注ぐ坂川の支流が北西へそれぞれ流れており、両水系の分水界に位置する。

坂川流域には出土遺物が国指定文化財に指定される縄文前期の松戸市幸田貝塚が所在するが、内陸部に入ると総じて遺跡は希薄となる。松戸市の本土寺過去帳によると室町時代の後期に酒井根ヶ原(現在の光が丘団地)で太田道灌と千葉孝胤との間で一大合戦がおこなわれた記録が残る。酒井根の合戦と称され、古戦場跡地に戦死者を葬ったとされる首塚、胴塚が所在する。戦国時代になると大谷口にある小金城主高城氏の支配下になる。

今谷上町を含む南柏周辺が歴史に登場するのは、江戸時代になってからである。幕府は日本橋を起点に五街道を設置し、それに準じる脇街道も順次整備した。千住と水戸を結ぶ水戸街道もその一つで、現在の旧水戸街道と重複する。南柏一帯は小金宿と我孫子宿の間に位置し、関宿、結城を経由する日光東往還道の分岐点にもなっている。さらに幕府直轄の牧場である小金五牧の一つ上野牧の南側に位置し、旧水戸街道沿いに名残の野馬除土手を見ることができ、牧と街道を画する木戸が設置されていたことが、絵図(註)や発掘調査で確認されている。江戸中期、財政再建を目指す8代将軍徳川吉宗は享保の改革で、殖産政策の一環として新田開発を推進し、南柏周辺もその開墾対象となった。これにより、享保年間の検地で「下総国葛飾郡今谷新田」と「小金上町新田」の二つの村が誕生する。しかし、水資源に恵まれない内陸の開墾は容易では無く、開発は困難を極め、当時あった市内の中でもっとも小さなものであった。

明治になり牧が廃止されると開墾事業が本格的に始まり、柏市南部にあった11の村は明治22年



図1 南柏位置図



図2 三上家住宅位置図

の小村が合併し、「東葛飾郡土村」になる。明治 29 年日本鉄道（株）土浦線（現在の常磐線）田端～土浦間が開通した。昭和 25 年、今谷新田と小金上町新田が合併して土村今谷上町が誕生する。そして、昭和 29 年に東葛飾市を経て柏市今谷上町となる。

昭和 28 年南柏駅の開設、昭和 32 年光ヶ丘団地入居に端を発し、東京のベッドタウンとして発展し今日に至り、今谷上町は南柏駅の表玄関になった。

三上家に残る古文書によれば、寛政元年（1789）十月、今谷新田名主今谷之助が領主宛に田畑を造成するにあたり田畑起返の届け出をしている。当主は代々「今谷之助」を継いでいる。そして、今谷之助が拓いた新田が地名の由来とされる。大正期には東葛飾共同馬車組合長として三上勇之介の名前が見える。

註 「小金原勝景絵図」（船橋市立西図書館所蔵）に見られる水戸街道の新木戸付近は今日の今谷上町あたりである。

## 2 三上家住宅旧主屋

### 2-1 概要

三上家は今谷上町の町名の由来となった今谷新田の名主、今谷之助を代々継ぐ、この地域における名家である。三上家住宅は JR 南柏駅南側、柏市今谷上町の旧水戸街道（県道 261 号線）沿い南側現千葉銀行建物の裏に位置する。現在は同敷地において、昭和 45 年（1970）頃から花店を経営している。

三上家旧主屋の建築年を記す歴史資料は見つかっていないが、現所有者の三上周史氏の曾祖父にあたる三上勇之助氏の時代、明治末期から大正期の建築といわれる。建物は当初、現敷地から北側の旧街道をはさみ、道に南面する現自転車店の土地あたりにあったが、昭和 15-25 年（1940-1950 年代）頃に現在地に移築された。

南柏周辺は昭和中期の駅開設から発展を見せ、特に 2000 年代に入る頃から東口駅前の開発が進んだ。今から少し前には近所に茅葺の住宅が他にもあったというが、現在近隣で茅葺の建物は三上家旧主屋と稲荷神社のみである。

南柏の人々の生活を伝える歴史的建造物として稀少であり、また柏市今谷上町の町名の由来となった今谷新田の名主・三上家の住宅として、町の歴史を伝える重要な文化遺産である。

三上家の敷地には、北西中央に旧主屋（増築洋館）、旧主屋の東側に茶室、南の西寄りに新居、新居南に店舗と販売所、南東にビニルハウス数棟が建つ。主に敷地の北西側に居宅建物、南東側に三上家が経営する花店の建物が配され、い

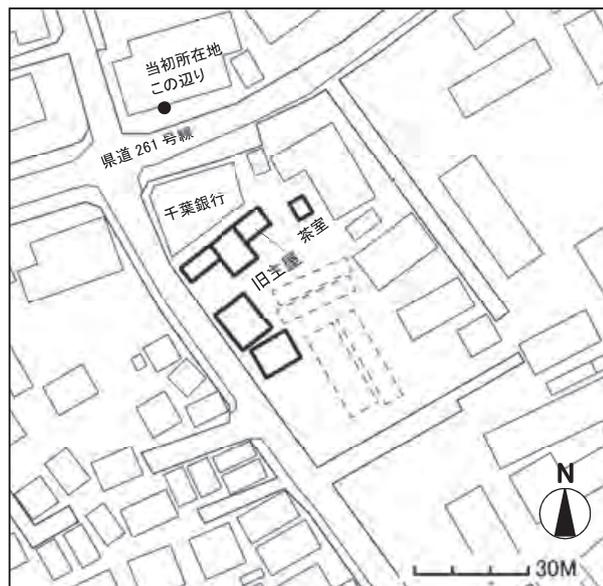


図 4 三上家住宅 配置図

ずれも南西側の通りに対し敷地入口を設ける。現敷地は北側にある旧街道に面していないが、昭和57年（1982）に銀行が建つ以前は、この敷地も三上家が所有していたという。1970年頃に建物南西側に木造2階建の洋館が増築された。洋館1階は洋室、風呂、台所を備える。増築以来、玄関はこの洋館南西側が担っている。

本調査では増築の洋館を除いた茅葺建物の旧主屋の調査を行った。次に詳細を述べる。

## 2-2 旧主屋

### 2-2-1 構造形式

#### 1) 平面

旧主屋建物は木造平屋、寄棟造茅葺、平入で南東を正面とする。桁行5間、梁間2間半の規模で、現状の平面は北東側から8畳と6畳の座敷を配置し、両座敷は正面の庭に対して縁を介した開放的なつくりとなっている。建物西に堀炬燵のある4畳半、南に洋室6畳のある4室の構成であり、南東と北東の2面に縁をまわす。縁は棧瓦葺とする。北角には便所を、縁と同様の軒を回す形式で配置する。

建物南西面には昭和45年（1970）頃に増築された木造2階建の洋館が接続している。また、背面（北西面）には桁行2間、梁間1間の物置を付属する。

#### 8畳

建物の東側に位置する。桁行、梁間各2間の居室である。北西面東寄りに巾1間の床の間、北西面西寄りに1畳の押入れを設ける。桁行方向の竿縁天井で、床の間を除き内法長押を巡らす。床の間寄り北東面に半間の平書院が付し、その他の縁境は腰付障子（ガラス窓付）を引違いに入れる。南西側6畳間との室境は襖4枚を2本引に入れ、上部は小壁に下地窓を設ける。

#### 6畳

8畳の南西に位置する。桁行1間半、梁間2間の居室である。桁行方向の竿縁天井で、内法長押を巡らす。北西面東寄りに半畳の仏壇、北西面西寄りに1畳の押入れ、仏壇と押入れの上部、東から1間分を神棚とし、小壁から突出する。8畳と同様、縁境は腰付障子（ガラス窓付）を引違いに入れる。6畳間の下手側の中央に7寸角の太い柱を立て、南西側の2室との室境には差鴨居を用いる。4畳半との境は開き、2溝入るが現状建具はない。洋室6畳との境は壁となっている。

各室は襖で仕切られるが、6畳の座敷と洋室6畳の間には壁が入る。

#### 縁

8畳と6畳の2室を囲むように南東面と北東面には半間の<sup>くわえん</sup>樽縁が付く。側廻りには約φ200の丸桁を用い、現状は2面ともガラス戸（アルミサッシ）が入り、雨戸を備える。戸袋（アルミ製）は縁の北端と西端の各辺それぞれに付く。南西端の洋室6畳との境は現状木製の開き戸となっている。

#### 4畳半

6畳の南西側には2室あるが、うち北西側は4畳半の北西面に奥行約500mmの窓（下部は地袋）が付く室である。桁行方向の竿縁天井で、南西を除く3面は差鴨居・差物を用い、南西面と北東面



外観 正面（南東から）



外観 斜め（東から）



外観 側面（北東から）



外観 斜め（西から）



内観 6畳から8畳をみる



内観 8畳から6畳をみる



小屋組 東から西をみる



茶室 正面 (西面)

壁面は内法長押を有す。南東の室境は鴨居に2溝残るが、建具は入れていない。室中央には約1畳の掘炬燵がある。

南西面は増築洋館に接続する。

### 洋室6畳

6畳の南西側、正面側には約6畳の現洋室が位置する。北東面縁との境には開き戸、南西面北端に洋館の廊下へ接続する開き戸を設ける。大壁仕上げで床はフローリングである。また、茅葺の本屋から突出した部分は、縁側の瓦葺に対し、増築洋館1階の庇と同様の板金（銅板）葺である。

当初はこの洋室6畳が土間仕上げの玄関であったが、洋館を増築した際に、床敷きで玄関を窓に変更したと考えられ、現状は洋館の南西面に玄関を設ける。

### 便所

8畳の北側に位置する。東側縁の北突きあたりに木製開き戸の入口を持つ。北西面は中央の柱をはさみ、内法下高さ約1尺の窓を設ける。各柱間に木製ガラス戸2枚を2本引に入れ、外側には二間にわたり約150mm間隔でφ12mmの鉄格子がつけられる。内装、便器は新規に変更されている。

### 物置

便所の南西に位置する。建物に付属し、外部に入口を持つ。桁行2間、梁間1間の約4畳である。屋根、外壁の仕上げから判断して、物置は後世の増築である。

## 2) 基礎

縁の束石は高さ100mmの四角錐台の形状である。外側から確認ができた、南西の洋館接続面を除く3方は布石で、柱・束下部のみ猫土台をはさみ隙間を設け、その上に土台、柱または束がのる。ほかは丸石を用いた礎石立てである。(写真1、2)

## 3) 軸部

南西面を除き外側から確認ができた3面は基礎上に土台を廻し、柱を立てる。また、地貫及び根太受けが付く。梁間方向に丸太の大引きを通し、桁行方向に丸太の根太をかける。柱はほぼすべてが106～110mmの方形である。6畳南西中央の部屋境の7寸（約210mm）角の柱、6畳の仏壇と西



写真1 縁下



写真2 床下

側押入れの間が134×130mm、8畳床の間の床柱が変木を加工しており約200×110mm、と異なる。

#### 4) 小屋組

小屋組は折置組おりおきぐみをなす。桁行の7寸角柱上の通りにφ140の梁が架かり、梁行は室境の通りと、室中央の通り（桁行一間半の場合座敷寄りから半間）を原則とし、計5本、φ130～190mmの梁が架かる。前述の桁行の梁に対し、中3本の梁行の梁は上におく。側面側2本の梁行の梁は桁行の梁を上におき、その上にななめの材（隅木か）が桁行方向対称に正面（南東面）の両角から45度で2間分内側方向に架かる。5本の梁行の梁の上に、桁行の梁が背面（北西面）側から半間の通りに架かる。4周の桁は100mm角で、これらの梁の上に架かる。

梁間方向の梁と同じ通りの中心（棟通り）に小屋束が建てられ、同通り上に約45度の傾斜で叉首さすが組まれる。桁行を小屋貫が通り、棟木に届かない建物側面側（北東・南西端）の束はさらに内側隣の束とのみ上端を繫梁で固定される。叉首組の上にはφ100の棟木が結われる。

室境のみ梁下まで土壁で塗込められる。

#### 5) 屋根

梁間2間半、桁行5間を寄棟造の茅葺とし、縁側と便所屋根は瓦葺である。また、6畳洋間の南東面突出部は金属葺、物置は波板葺である。現在の茅葺は平成15年（2003）に、三上家が氏子で



写真3 小屋組 西から東を見る



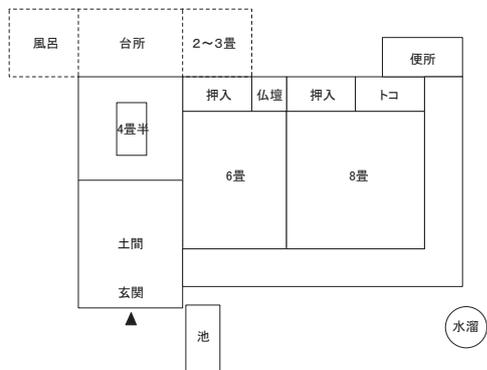
写真5 グシ棟



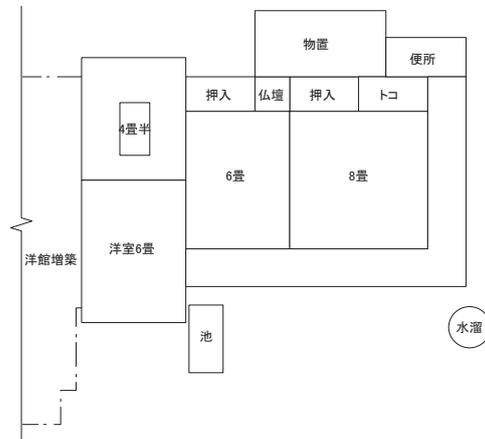
写真4 小屋組 東から西を見る



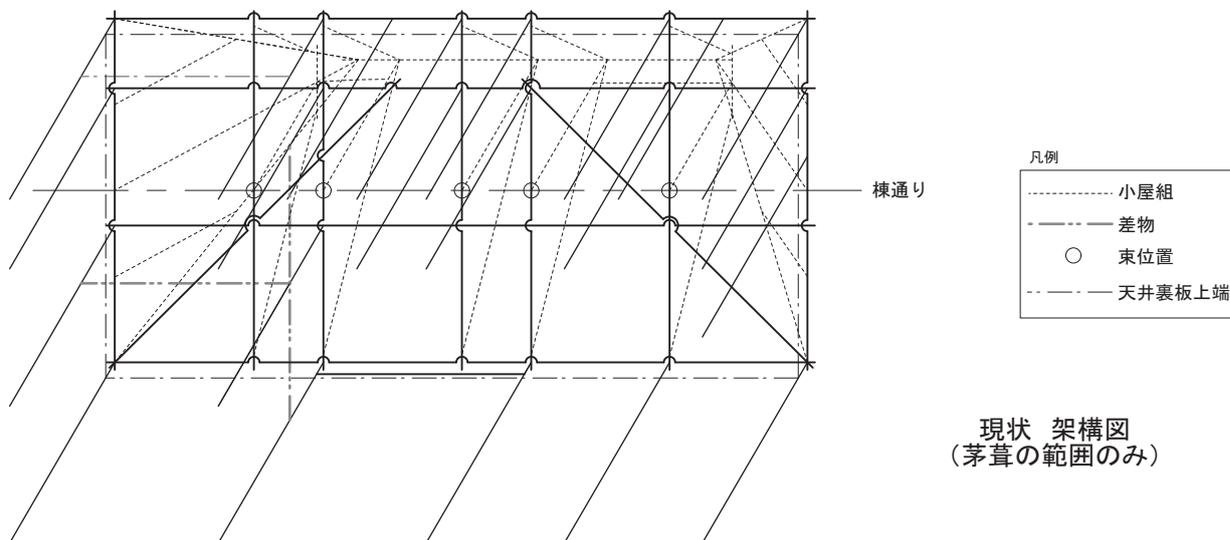
写真6 茅葺隅部



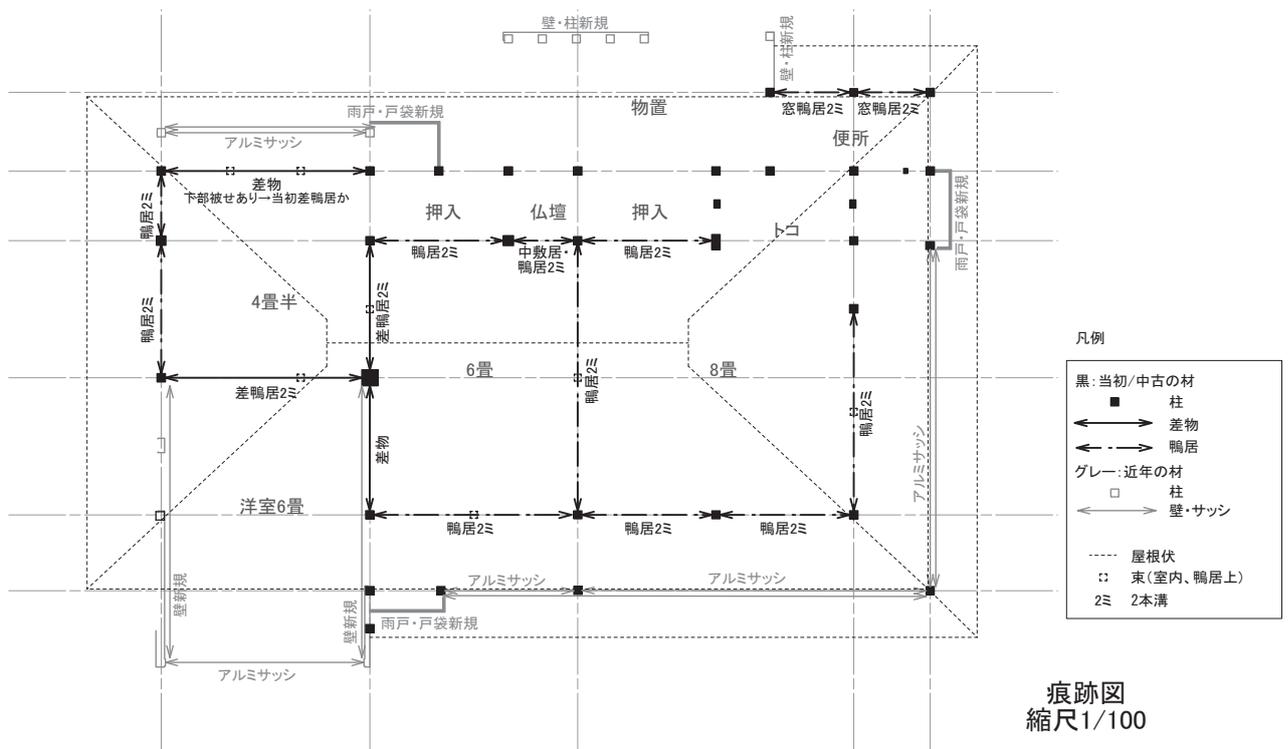
洋館増築前1970年頃(聞き取りによる) 略平面図  
縮尺1/200



現状 略平面図  
縮尺1/200



現状 架構図  
(茅葺の範囲のみ)



痕跡図  
 縮尺1/100

ある稲荷神社（今谷上町 63）（写真 11）の茅葺替に伴い、柏市高柳の棟梁のもと、葺き替えられたものである。

茅葺は 4 周側桁が垂木竹を受ける形式である。4 隅は棟木端と追又首でつなぎ、寄棟屋根を形成する。又首流れに 7 通り屋中竹（中央通りのみ丸太材）をのせ、垂木竹をのせる。又首から垂木竹を荒縄で固定し、えつりを敷き、茅をのせる。軒付の最下層には稲藁を葺き、古茅と新茅を層にして葺くなど「筑波流」の葺き方をみせる（写真 6）。垂木の外側先端には鼻隠板を付け、梁端部は隠れる。

グシ棟は割竹を全面に被せる（写真 5）。

## 6) 造作

### 土壁

室内は土塗仕上げで、縁の壁面は鼠漆喰仕上げである。背面（北西）外壁は物置北西面を除き、内法下を押縁付横板貼とし、上部を漆喰仕上げとする。

### 床の間

床柱と落とし掛けには変木を用いる。床板の奥行巾は約 500mm、厚さは 55 mm で、床板上面は畳面より 120mm の高さである。



写真 7 8 畳 床の間と仏壇



写真 8 洋室 6 畳と縁の境



写真 9 茶室 南面



写真 10 南から見る 旧主屋と西側に接続する洋館

## 仏壇

木製である。上部は腰付格子戸 4 枚を 2 本引に入れ、中央に引出、下部に引違い板戸が入る。仏壇最上部の欄間中央には三上家の紋（丸に三つ鱗）が記される。制作年代は明らかでないが、位牌には江戸期のものも存在する。

## 7) 庭

建物の正面である南東側は庭である。6 畳、8 畳の 2 室は正面縁にむかって全開口とし、庭に対し開放的である。現状から当初の庭を知るのは困難であるが、建物正面西寄りの雨戸戸袋前に約 1 畳の池、正面東角に直径 1m 強の円形の水溜（コンクリート製）を確認できる。両方とも雨水を蓄えるよう雨樋からパイプを引いている。また、8 畳前の縁前には大きな沓脱石を配しており、門から茶室にかけて建物正面前を横切る飛び石が見られ、特に茶室周りに中木が数本生える。

### 2-2-2 変遷

三上家旧主屋は所有者の周史氏の曾祖父にあたる三上勇之助氏の時代、明治後期から大正期の建築とされる。祖父の信次郎氏は昭和初期（1930 年代頃）に 15 歳で養子として三上家に入った。信次郎氏は農家や養鶏、養豚も行ったが、第二次大戦後からは植木屋（盆栽・植木の卸）を主に行っていたという。現在三上家が経営する花店は昭和 45 年（1970）頃から始められた。

昭和 45 年同時期には旧主屋西に洋館が増築されている。洋館増築後は、周史氏の父である勇之助氏家族は主に洋館で、祖父母の信次郎氏、千代氏は旧主屋で生活していた。同時期、周史氏の幼少期には、堀炬燵のある 4 畳半は家族の居間のように使用されており、この北西側には、竈のある台所、さらに台所西側に風呂場、台所東側に 2～3 畳の部屋（祖母、千代氏が使用していた）が存在したようである。それらは千代氏が他界した昭和 53 年（1978）頃から徐々に変更され、現状の間取りになったという。

またこの時期、近年に新居が建てられる以前までは、敷地に建つのは旧主屋と洋館、茶室、ビニルハウスのみであったという。

南西に位置する洋室 6 畳は、もとは土間仕上げの玄関であり、南東を入口としていた。洋館に合わせた仕様が見られることから洋館建築と同時期に大きく変更されていることが想定される。

古写真（写真 11・12）は、昭和 40 年代に撮影されたものであるが、縁側のガラス窓の様子がうかがえる。

物置は恐らく信次郎氏の書庫として、後に建てられたもので、近年 20 年程は使用されていない。

旧主屋の茅葺屋根の葺き替えは平成 15 年（2003）に三上家が氏子である稲荷神社（千葉県柏市今谷上町 63）（写真 13）の葺き替えに伴い行われた。柏市高柳の棟梁が担当し、作業は周史氏父の勇之助氏を始め、近隣住民の協力のもと行われた。

庭の池には以前、鯉やカエルがいたが、観賞用というよりも、井戸が建物からやや離れてあったた



写真 11 古写真（昭和 40 年代）



写真 12 古写真（昭和 40 年代）

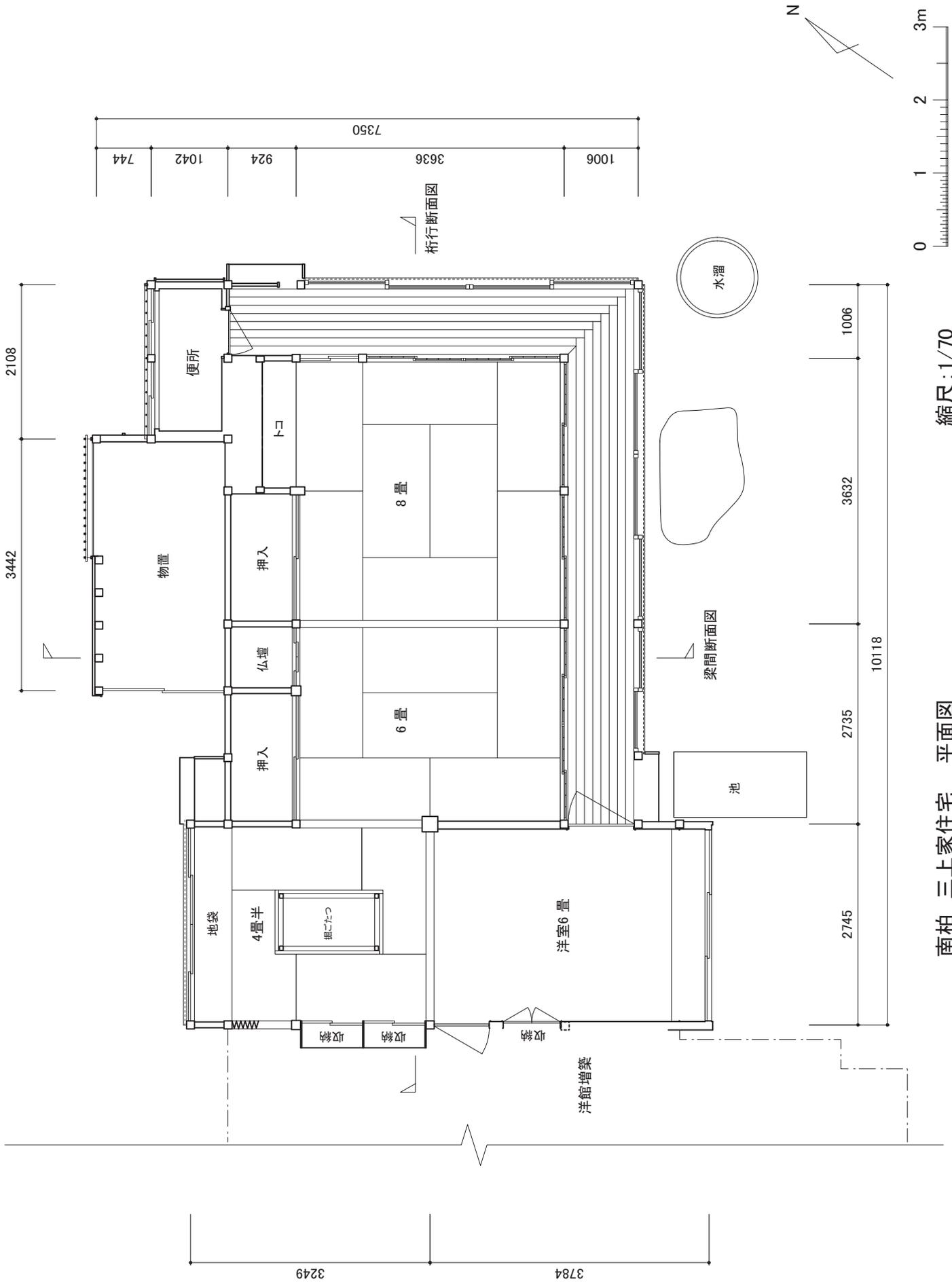
めに水を貯めるためという役割が重視されていたという。庭は以前は竹林であったため、建物下の地面には現在も所々に竹が生えている。

東側に建つ茶室は千代氏の建築で、50年以上前の建築といわれる。近年は20年程使用されていない。

※ 建物の来歴については、平成 25 年 9 月 4 日に行われた現所有者の三上周史氏からの聞き取り調査による。

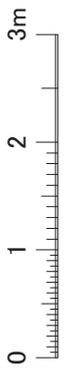


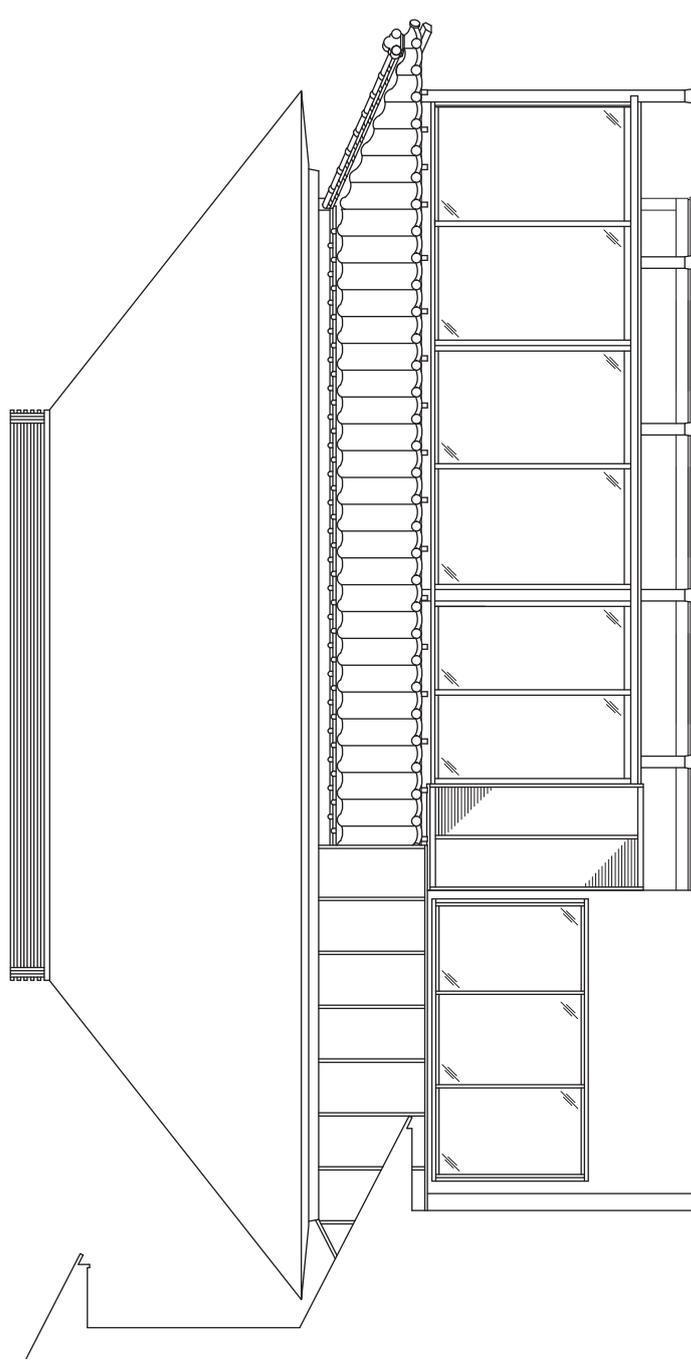
写真 13 稲荷神社（今谷上町 63）



縮尺: 1/70

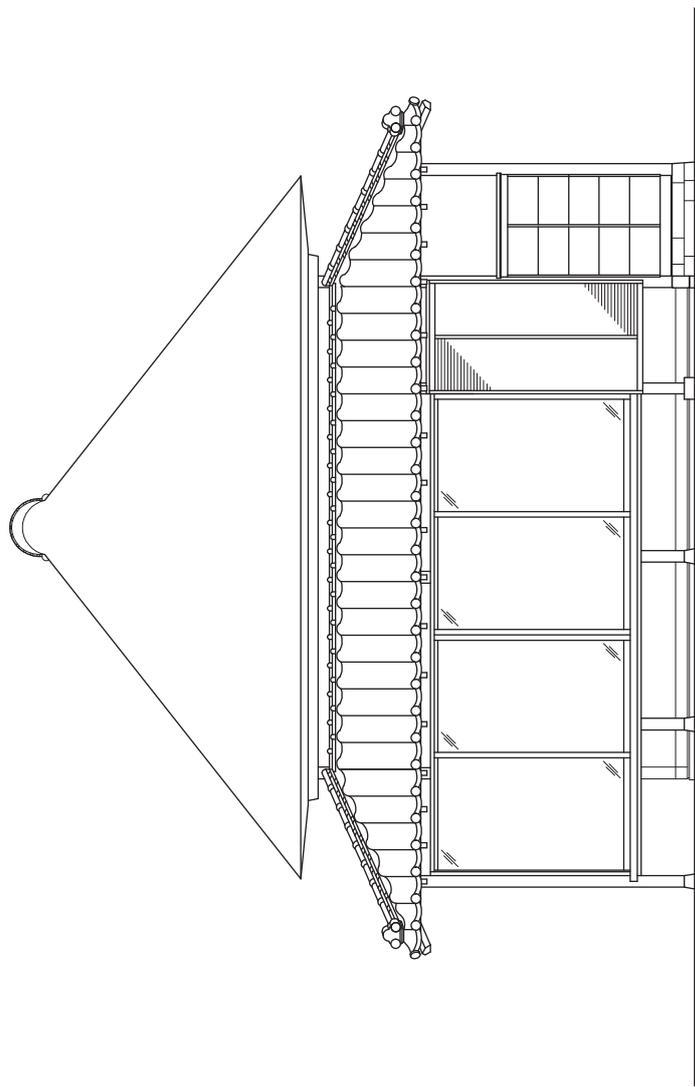
南柏 三上家住宅 平面図





縮尺: 1/70

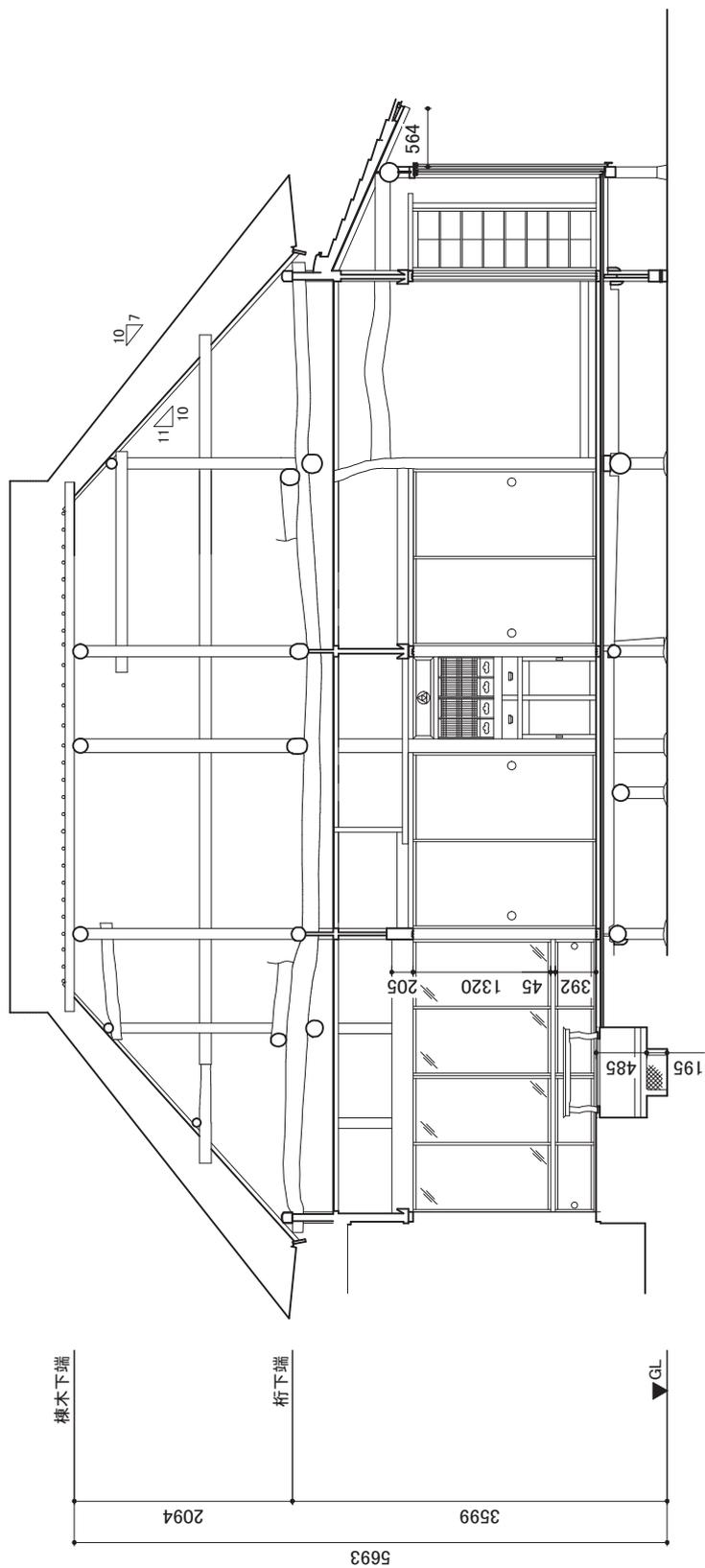
南柏 三上家住宅 正面図(南立面図)



南柏 三上家住宅 側面図(東立面図)

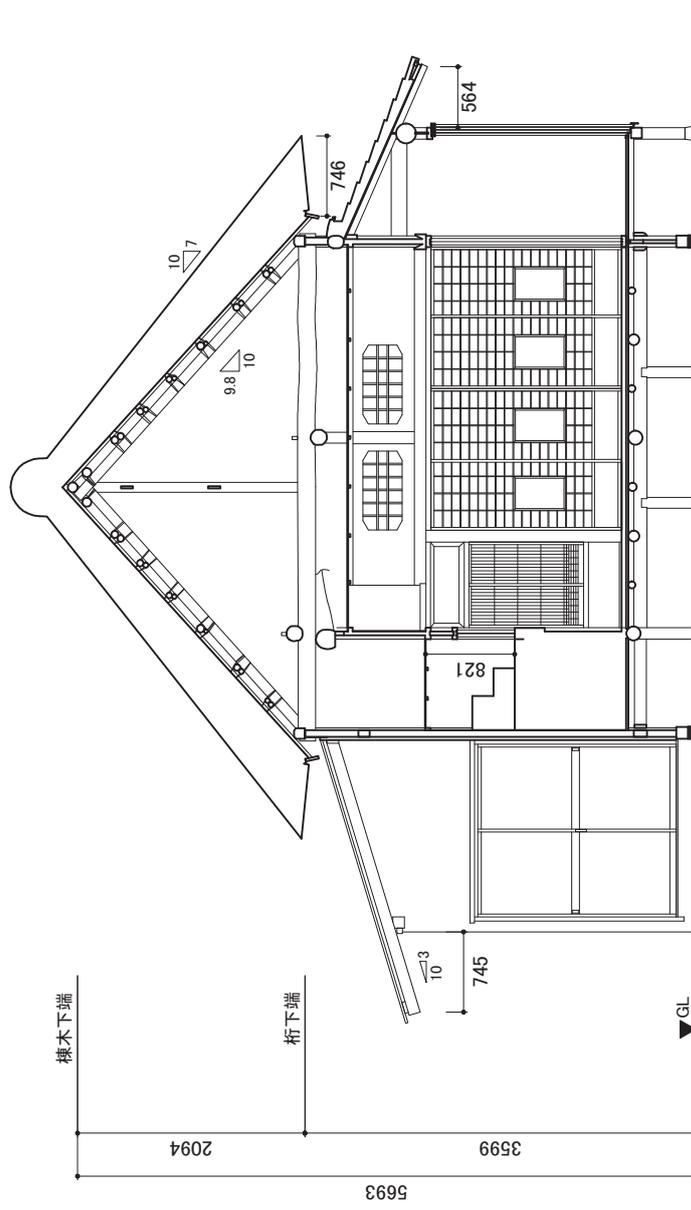
縮尺:1/70





縮尺: 1/70

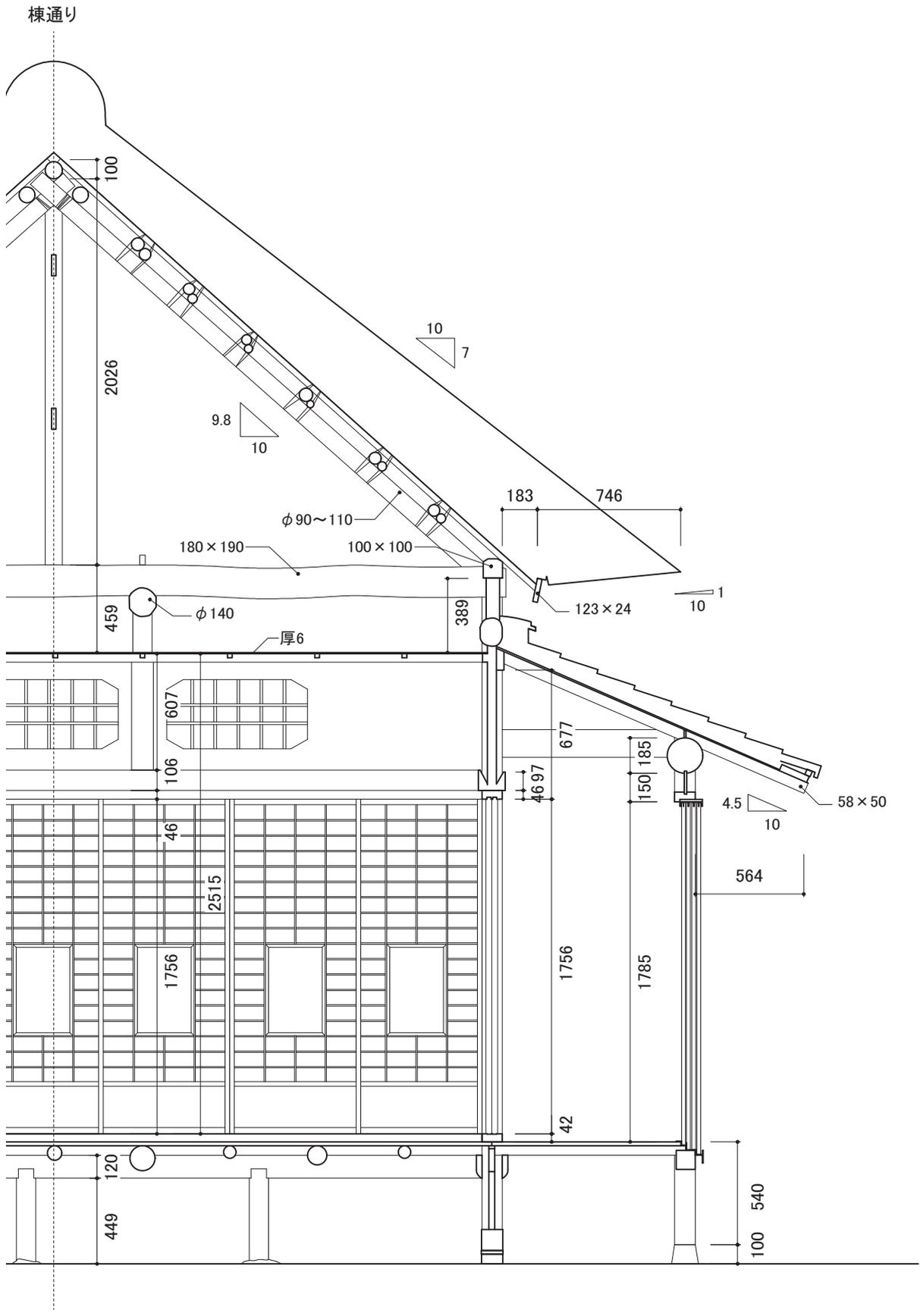
南柏 三上家住宅 桁行断面図



南柏 三上家住宅 梁間断面図

縮尺: 1/70





南柏 三上家住宅 矩計図(梁間) 縮尺:1/30

